

何年かぶりに東大に戻ってきた。東京といってもこのあたりは、高層の建物があまりなく、光があふれている。運動場にめぐまれた駒場キャンパスは私にとって、数学漬けの日々を過ごした本郷キャンパスとは違い、スポーツの記憶にもつながっている。

数学科に進学した直後の2年生後期には加藤晃史さん（現東大数理）と益岡竜介さん（現富士通）に半年ほどではあったがテニスの手ほどきをしてもらった。

体育の授業で覚えたバレーボールも楽しかった。駒場の駅を降りて数理の建物に向かう途中にある屋外コートで、毎週よく練習したものだ。私は中高で卓球の部活動をしていた。卓球ではたまたま世界チャンピオンの選手に教えを受けたことがあったものの、バレーボールは全くの自己流だった。駒場の体育の授業の先生が教えてくださるトレーニング法とその根拠には感心させられた。以前に全日本女子バレーの指導をされていたとのことだったが、「東大生は全日本の選手とは違う、だから当然その違いに見合った指導をする」という姿勢に感銘を受けた。なによりも、指導の端々に「とにかくケガをさせない」という暖かいまなざしがあった。

その先生に刺激されて、どういう手首の動きで打てばいいのかを研究してみたくなり、紙風船を使うことを思いついて、空中にふわりと紙風船を浮かばせて試行錯誤を繰り返したこともある。この練習が役に立ったとは全然思わないが、チームが編成されてゲームをするようになってからは、私のいたチームはなぜか無敗で2回優勝した。

その後、本郷キャンパスに移り、修士号をとって助手となってからも、また北欧やプリンストン（米国）などに渡航して研究生生活をするようになった先でも、誘われるままバレーボールをした。海外では身長が190cmを越える人たちも多いので、垂直方向に飛んで張り合うのはあきらめ、水平方向に活路を見出してはよく回転レシーブ（こけてレシーブ）をして球を拾っていた。

数学でなにごとかをなさんと思うならば、心身ともに壮健であるにこしたことはない、と思っていた頃の話である。

